泉
いずみ

ー目次ー

表紙　「勿忘（わすれな）の鐘」
百折不撓「高校生の答辞」　野呂大悟
震災の表白　野呂美道
連載「私の出会った神様たち㉟」
ともに歩み　命に寄り添う⑩　浄香
掲示板・お知らせなど
＊付録　ハザードだより

勿忘の鐘（3月11日）

春浅し　記憶つなぐや　震災忌　　博子

発行責任者：安泉寺　住職　野呂大悟　　住所：〒496-0945愛西市三和町中ノ割173-1 電話：0567-28-0001

百折不撓「ある高校生の答辞」　野呂大悟

今月号は、能登地震については次号にして、ある高校生が卒業式に読んだ「答辞」をご紹介します。神奈川の桐朋高校の答辞の全文が掲載されていたので、引用します。この文章を読んで、これからの若者の未来は明るい！！って思いました。少し長いですが是非お読みください。

答辞

ブラジルの1匹の蝶の羽ばたきは、巡り巡ってアメリカ・テキサス州のハリケーンの原因となりうるでしょうか。1972年、アメリカの気象学者エドワード・ローレンツは正確な気象予報の困難さをこのように例え、初期条件の僅かな違いが観測結果に大きな影響を与えることを示しました。ローレンツのこの問いはやがて「バタフライエフェクト」として大衆文化にも受容され「偶然に導かれた数奇な因果関係」を意味する言葉として用いられています。本日体育館の外に吹いている朗らかで少し物寂しい風も、ともすると3年前・6年前初めてこの学校に足を踏みいれた時の肌寒く不安な風の名残なのかもしれません。

自らの歩みを振り返り、新たな日々を予感させる春風が吹くこの佳き日に、桐朋高等学校78期、293名の卒業式を挙行くださること、卒業生を代表し感謝申し上げます。そして六年間僕達に知的好奇心の入り口を開け続けてくださった先生方、また何より18年間僕達の成長を見守ってくださった保護者の皆様に、重ねて御礼申し上げます。

振り返ると78期は常に風と共に歩んできました。2019年4月1日、「平成」に替わる新元号「令和」の発表。出典の万葉集に曰く、「初春の令月にして、気淑く風和らぎ…」しかし、令和最初に吹いた「風」は通常の「風邪」を遥かに凌駕した未知の感染症でした。「期末試験は中止です」最後の登校日、担任の先生が複雑な表情でそう告げた時、歓喜の声を上げた僕たちのそばで一人下を向いていた友人が流した悔し涙が、コロナの残酷さを如実に物語っていました。憎たらしいほどの青空の下で、僕たちの中学修学旅行は、部活の試合は、そして何よりマスクの下に見るはずだった皆の笑顔は、全て「不要不急」の4文字に淘汰されていき、その鬱憤を誰のせいにもできない葛藤の毎日が続きました。それでも、時計の針は進み続けます。たとえそれが黒板に打ち付けられた腕時計の針であっても。桐朋祭は3年ぶりの有観客開催となり、熱狂の渦を取り戻しました。無事に迎えられた高校修学旅行、旅館の屋根の上、あるいは大文字山から見た京都の星空は、さぞ格別なものだったでしょう。「7回学んで8回笑え」修学旅行のこのスローガンは元々「7回笑って8回学べ」だったそうです。最後は笑いたいよね、実行委員のその一言で少しだけ変わったこのスローガンからは、一生ものの信念を感じます。

しかし、僕達のこの信念は、決して既存体制への反骨心に基づくものではなく、僕らに本質的に内在する潤澤な学びと笑いへの希求である、僕はそう思います。僕達でなくして誰が、壊れたプリンターで射的をしたでしょうか。電子研は78期の学びある

発行責任者：安泉寺　住職　野呂大悟　　住所：〒496-0945愛西市三和町中ノ割173-1 電話：0567-28-0001

百折不撓「ある高校生の答辞」　野呂大悟

笑いの象徴でした。僕達でなくして誰が、教室のベランダにガーデンテラスを作ったでしょうか。中学最後のスポ大、掟破り瀬戸際のクラTを着て優勝した3年1組が、僕はとても羨ましかった。僕達でなくして誰が、数学の問題集より分厚い修学旅行のパンフレットを作ったでしょうか。学校説明会に来た小学生がこれを見て目を輝かせていたのは忘れられません。CreationとImaginationが同じ「そうぞう」という音なのは日本語の奇跡としか言いようがありませんが、僕達にとってこの両者はもはや同一でした。そしてまたこれも言葉の綾ですが「そうぞう」はえてして騒々しい――群馬県警を呼び、1年1組の天井を破壊し、あるインドカレー店と癒着ができました。ともかく、78期はなんというか、豪快でパワフル。学年閉鎖をことごとく回避し「馬鹿は風邪をひかない」あまりのうるささに呆れ顔で言われたその言葉ですら、僕達には誇らしく感じられました。馬鹿と言えば、これまた「そうぞう」の一環として、生徒による学年通信「馬鹿たれ」を想起した方も多いことでしょう。学年目標を冠した本家「大鵬たれ」のパロディとして作られたこの「馬鹿たれ」、後付けではありますが、かのスティーブ・ジョブズの演説も由来の1つだそうです。“stay hungry, stay foolish”僕達はこの演説を高2英語総合の授業で学ぶことになります。偶然、ちょうどそのころ、この演説を扱ったある番組がNHKで放送されました。1人の細やかな営みの連鎖が、世界を動かす、と語られるこのシリーズ番組は、また偶然にも僕たちが高1の世界史で学んだ「映像の世紀」の続編で、その名も「映像の世紀　バタフライエフェクト」　2022年11月7日の放送回では、「世界を変えた愚か者」としてご存知ジョブズと、彼に影響を与えた思想家バックミンスター・フラーが紹介されていました。フラーは人類の持続可能な発展についての先駆的概念「宇宙船地球号」の提唱で知られています。バタフライエフェクトと「宇宙船地球号」はともに、いかなる矮小な存在も雄大な世界の要素であることから逃れられないことを示しました。1人の細やかな営みの連鎖が、世界を動かす。情報化社会と呼ばれる今日、それはいよいよ僕ら若者のレベルですら現実となりつつあります。絶えず大衆を突き動かし、ふと消えていくこれらの動きは、まさに風と形容するに相応しい。ですが、風そのものはいかなる善悪も吉凶も帯びていません。曖昧で流動的で得体がしれない、だからつい単純化し、意味づけしたくなるだけなのです。0か1かで定義されるデジタル技術が世界を支配する一方、0と1の間の無限の可能性を認める多様性、個性といった言葉が盛んに繰り返されています。しかし、個性的とは決して固定的なものではない、まして赤の他人から全角140字で押し付けられるものではない、僕は同級生の底知れぬ人間力と接する度にそう思います。僕達が一生かけて取り組む問題集には別冊の解答解説なんてついていません。解説されてたまるものか。解答なんてあるはずもない、だけれども、あるいはだからこそ、その問題を直視し、従うべき、逆らうべき風を判断せねばなりません。さてこの“stay hungry, stay foolish”　“be foolish be hungry”ではありません。僕達はいつまでfoolish、馬鹿でいられるのでしょうか。

発行責任者：安泉寺　住職　野呂大悟　　住所：〒496-0945愛西市三和町中ノ割173-1 電話：0567-28-0001

百折不撓「ある高校生の答辞」　野呂大悟

無知を馬鹿というならば、僕は永遠に馬鹿で構わない。無知とは、また新たな何かを学べるということであり、学びとはすなわちその奥に未知が存在することへの知覚なのですから。高1の時、担任の先生がこう言っていたのを思い出します。「学ぶ意味なんて学びきるまで分からない、でも意味がわからないから学ばないってのは、あまりに安直だよね」学びには王道もなければ聖域もない。永久の学びを志向する者ならば、他者に対し冷笑的、厭世的な態度で臨むことは許されません。

馬鹿は風邪をひかない――己の無知を自覚し、故に学び続ける「馬鹿」であるならば、流言飛語やデマといった一時的な「風」に惑わされることはないはずです。未成年という防風林が除去された僕たちには、今後多くの逆風が吹きつけるでしょう。時には向きを変え、その逆風を追い風に変えることも重要な戦略の一つです。ですが、青臭いかもしれないが、コロナ禍を乗り越えた学年として、いやそうでなくとも78期として言わせてほしい。逆風を味わうことができるのは、前に進む者だけだ、と。

さらに僕達はそう遠くない未来、風を受ける側から風をおこす側になるでしょう。最後にこんな話を紹介させてください。ある日、生徒会の意見箱に右翼や左翼といった言葉を使って特定の政治思想を中傷するものが投書されていたことがありました。どう返信しようかと悩み、そのまま机に置いて帰った次の日、誰の字とは分かりませんが、しかしはっきりと次のようなことが書かれていました。「片方の翼だけでは、鳥は空を飛べません」　僕達が大鵬ならば、両方の翼を自在に使いこなせる大鵬でありたい。大鵬は古代中国における季節風の象徴だという説があります。中国大陸の南、太平洋を吹き抜ける季節風は、古来より貿易船の帆を押し、東西文明の融合、新たな文化の隆興を育んできました。1匹の蝶でさえハリケーンを引き起こすなら、293羽の大鵬は何をもたらすのでしょうか。僕達がおこす風もまた、曖昧な他者を融合させ誰かの「そうぞう」の一助となると信じています。

桐の朋。ですがけっして「これっきりのとも」ではないはずです。

数千里の翼を伸ばして校舎の外に尚も広く晴れ渡る大空を悠々と、颯爽と翔けていく我ら大鵬。

78期が飛び立つ空に、学びあれそして笑いあれ。

78期よいつまでも、馬鹿な大鵬であり続けよう。

2024年3月2日　78期卒業生代表

発行責任者：安泉寺　住職　野呂大悟　　住所：〒496-0945愛西市三和町中ノ割173-1 電話：0567-28-0001

震災の表白　　野呂美道

◆元旦に能登で大地震がありました。東日本大震災から十三年が経とうとして、またしても大きな地震に見舞われました。災害は忘れる前にやってくるとは昨今の新しい常識になりました。◆能登の避難所の映像を見ていて、阪神淡路と、東日本の震災の時と、状況があまり変わっていないことに驚きました。冷たい体育館の板の間に直接布団を敷いて、パーテーションもなく、すし詰めの状況が報道されました。大震災の教訓はどこに行ったのだと、憤懣やるかたない気持ちになりました。◆ペットや、障害を持つ人たちは、集団になじめません。その為に、車の中や、壊れた家に閉じこもって、避難をあえてしない人たちもあります。◆「事前復興」という言葉があります。震災で壊れることを予想して、家を補強したり、食料や水を備蓄したり、各家庭で、生き残ることができるように、事前に整えられることをしておこうという考えです。◆これは、もちろん各家庭にとどまりません。ご近所や町内、地域の防災をあらかじめ考え、住民が自らの手で、生き残ることを想定し、準備をするのです。◆私は女川の竹の浦地区の、復興までの歩みを住民の方々と共に見届けました。竹の浦地区は日ごろから人々の交流があり、それは獅子ふりというお祭りでより強固なものになっていました。これは立派な事前復興です。◆人々のつながりが深いからこそ、迅速な避難や、仮設住宅での六年間や、多くの人たちが集団高台移転を成功させたことなど、私たちへの教訓に満ちています。私たちは、このことをこそ学ばなければなりません。

◆自助ということが叫ばれています。それは日ごろいかに防災の事を各自・各家庭が考え続けるかということに尽きます。同情だけで、自分の問題にしなければ、何も学んだことにはなりません。まず、私たちは何をすべきかを各自で考えるべきです。◆どんな時に、どんな事態に遭遇しようとも、災害を事前に想定して手を打っている人々は慌てません。「むむ、来たか！」とちゃんと受けて立つ準備ができています。皆さん、そうなるようにみんなで考えようではありませんか。

◆東日本大震災の追悼法要にあたり、以上の表白を述べた。私たちは、何度、学ぶべき機会を与えられても、それを自分事と捉えない限り、「教訓」にすることはできない。

今こそ、応える時である。

安泉寺にて

発行責任者：安泉寺　住職　野呂大悟　　住所：〒496-0945愛西市三和町中ノ割173-1 電話：0567-28-0001

「私の出会った神様た㉟」

西村滋

アキラ❷

◆戦争孤児の施設の裏庭は、卒塔婆で一杯になってしまいました。でも、誰も塀を壊されたことを怒ることはできませんでした。◆トモちゃんたちはお母さんが死んだと思っていますからいいのですけれども、このアキラくんは、死んでいないと思っていたのです。だからお墓も作りませんでした。そして、一週間にいっぺん、十日にいっぺん脱走するのです。どこへ行くかというと、浅草の隅田川へ逃げてゆくのです。隅田川の「ことといはし」というところで、彼はお母さんと別れました。そこへ行くと、あの晩別れたお母さんに会えると固く信じていたようでした。◆しかも彼は歩いて行くのです。戦争孤児の収容所がありましたのは、東京の世田谷区です。大人の足で一生懸命歩いたって浅草まで半日ではいけません。◆そこを栄養失調で頭だけでかくなった子供が、水だけ呑んで、歩いて行くのですから。◆僕は彼に言いました。「どうして歩いてゆくの。」というのはほかの子供も逃げる子は一杯いました。貧乏な施設に居て、食べるものもろくにないところに居るよりも、町へ行ったほうが良いのです。靴を磨けばお金はもらえるし、何とか食えるのですから。だからみんな逃げて行く。◆逃げて行く子は電車賃とかバス代を近所で何か悪いことをして、作ってゆくのですね。僕はあの子たちのやったことを非行とは呼びたくない。◆国家が戦争をして、親を殺し、家を焼き、そして勝手に生きよということは、勝手に死ねと言うことと同じだと僕は思いますけれど。◆今は色々な補償などということを言っていますけれども、戦争孤児の補償などというものはない。年金もない。あのとき、五つ、六つ、七つ、そんな子供が焼かれてほうり出されて、一人で生きていかねばならなかった人生に対する補償が全くないというのは不思議でしょうがないのですけれど。◆だから僕はあの子たちのやったことを非行とは呼びたくない。だからアキラくんに言いました。「お前はどうしてやらないの。」◆こんなことは先生が言ってはいけないことです。「どうして、お前はほかの子供たちのように悪いことをしないの。そうすれば電車賃とか、バス代とか何とかできるじゃないか。」◆こう聞いたとき、答えたアキラくんの言葉が、僕を作家にしたといってもいいでしょう。

（続く）

発行責任者：安泉寺　住職　野呂大悟　　住所：〒496-0945愛西市三和町中ノ割173-1 電話：0567-28-0001

ともに歩み、命に寄り添う

第十回　逝きかたを問い続ける

浄香（きよか）

人の命とは、不思議です。看取りを始めた時に在宅ケアクリニックの先生からいただいた「お別れが近づいた時の様子」に書かれていた症状が出てきたので、父の命が長くないことは分かっていました。それでも、一日でも一時間でも長く生きてほしい。そう思いながらの看取りの日々。お見舞に来てくださる人たちと楽しそうに話をしていた父でしたが、日に日に弱っていくのが分かりました。私の居場所は、父の畳ベッドの上に敷いた座布団の上。そこに座って父の身体に手を添えるのが、私の日課です。常に考えていたのは、父の苦痛を少しでも和らげ、穏やかな死を迎えるために、私は父に対して何ができるのかということ。延命治療をどこまでするのか、しないのか。日々、在宅ケアクリニックの先生とご相談しながらも、常に迷いがありました。最初の選択は、透析を続けるのか休むのか。「心筋梗塞状態での透析は辛いに違いない。透析中に亡くなる可能性もあるという。ならば家で過ごす時間に」と、透析を休む決断をしました。透析を休むと体内に水分や老廃物が溜まって、全身に痒みが出てきました。心筋梗塞による背中の痛みも増してきて、私は父の背中をかいたりポンポンたたいたり。食事も次第にとれなくなって、いただいたメロンやプリンを食べるのが精一杯。やがて固形食が食べられないように。このような時、本来なら栄養補給として点滴をするところですが、父は透析を休んでいるため体内に水分を入れることができません。そこで父の大好きだったコカ・コーラを凍らせてシャーベット状にしたものを口に含ませるだけになりました。血中酸素濃度も下がってきて息が荒くなってきましたが、人工呼吸器をつけることなく、マスクをつけて酸素濃縮装置から送られてくる酸素を吸うだけに。痛みに対しては、処方していただいたモルヒネで対応していましたが、身体が受けつけないようになって嘔吐するため、座薬に切り替えました。

人工透析を休み、人工栄養をとることもできず、人工呼吸器にも頼らない。酸素を吸う以外、何の医療機器にもつながれず、いつもの慣れた自宅のベッドに横たわる父を見て、「尊厳死とは何か」を改めて考えさせられたのでした。もうすぐ、〝その時〟が必ずやってくる。私は、父をじっと見守ることができるのだろうか……。父の身体に手を添えながら考え続ける私に、父は苦しそうにしながらも、微笑みながら言ったのです。「ず～っと、一緒にいるね」。私はいつまで父の声を聞くことができるのでしょうか。

※尊厳死：過剰な延命治療を行わずに、自然に死を迎えること。

発行責任者：安泉寺　住職　野呂大悟　　住所：〒496-0945愛西市三和町中ノ割173-1 電話：0567-28-0001

4月の行事予定

大成講	一日（月）
おみがき・保全会総会	十三日（土）
文芸クラブ	十八日（木）
写真クラブ	二十日（土）
永代経	二十九日（月）

今月の掲示板

議論は人を分けるが、
実践は共感を教える

石川洋

◆行動する前の熟慮は必要ですが、そればかりに重点を置きすぎると、行動できません。やってみなければ分からないことも多い。行動を通して理解し合えることもあります。思い立ったら、即実践！

訃報

◆矢木昌子さん　小茂井町　享年九十二才
◆堀田はるさん　立田町　享年百二才
◆高橋正恵さん　四日市市　享年五十四才

いずみのほとり

◆亡くなった、高橋さんは、私の高校教師時代の教え子です。大変な頑張り屋で、夫婦力を合わせて、刺繍工場を立ち上げ、四人の子供を育ててきました。道半ばで病に倒れ、この若さで浄土に召喚されました。彼女の奮闘人生はいずれ寺報で紹介することも考えています。

◆月末に能登の被災地へボランティアに行ってきました。この報告については、別刷りの「ハザード便り」で、連載し詳しく報告したいと思います。今月の言葉のごとく、活動を通じて、多くの方々と繋がりました。日ごろ私が描いていた方のイメージががらりと変わり、ともに行動する中で、誤解や思い込みの気持ちが、尊敬の念に変わっていったことが、自分でも驚くべき事でした。

◆安泉寺の周りにも、春の訪れは確実にやってきます。先日、境内で鶯（うぐいす）の声を聞きました。ほぼ、完璧な鳴き方で数回はっきりと聞こえました。その声を聞いたとたん、まわりの風景が一瞬に明るさを増し、風が和らいだような気がしました。

◆何気なく田んぼに目をやると、例のコウノトリのコウちゃんが、元気にえさを啄（ついば）んでいます。もうこの近くにいなくなったかなと思っていると、突然姿を現して、私たちを喜ばせてくれます。「僕はちゃんと元気だよ！君たちは？」と呼びかけてくれているようで嬉しいですね。（老僧）

発行責任者：安泉寺　住職　野呂大悟　　住所：〒496-0945愛西市三和町中ノ割173-1 電話：0567-28-0001